

「古くて新しい人」

古くは「金繕い」、今では「金継ぎ」という、日本伝統のリサイクル技法があります。割れた器やお皿の、その割れた断面を漆で繋ぎ合わせて、細い筋となった漆の表面を金や銀で彩ることで、原型よりもさらに愛着の沸く、唯一無二の割れ目を活かした、美しい一品に仕上げる、そんな凄い技法です。一方で、実は、インターネット通販大手の、Amazon や楽天市場でも、「金継ぎセット」なる商品が売られておりまして、手軽に入手可能だったりします。だから、金継ぎしたいがために、家の皿を割ってみたいなあ、という衝動が、ちょっと、ね。これ割って、金で繋げたら、格好良いんじゃないかという。素人にも簡単にできるものか、どうか、インターネットの情報だけじゃ分かりませんけどね。

しかし、砕かれたものに愛着を見出すという心根は、もしかしたら、ユダヤ教から続くキリスト教の根本に繋がっているのかも知れません。「わたしは、高く、聖なる所に住み、打ち砕かれて、へりくだる霊の人と共にあり、へりくだる霊の人に命を得させ、打ち砕かれた心の人に命を得させる」。これはイザヤ書 57 章 15 節の御言葉です。

「打ち砕かれる」ということ自体は、悲しいこと、痛いこと、避けるべきことです。でも、生きていたら、そういうことって、ままありますよね。心に傷やひび割れのない人は、多分いないし、もし、いたとしたら、それは奇跡的に幸せな人であるでしょう。人生を歩んでいたら、どんな善人でも不条理な出来事による心の傷や心の割れは免れないし、どんな悪人の黒くて鈍い心にも、一筋の傷や僅かな割れは生じると思います。キラキラ眩しい人にも悩みはあり、極悪非道な人にも痛みはある。そういう人間理解って、私は大事だと思います。誰であれ、傷があり、割れがあり、悩み

があり、痛みがある。そして、その傷や、割れや、悩みや、痛みを、繕ってもらって、継ぎ合わせてもらって。新たな気付きや、慰めや、あるいは深い懺悔の想いを経て、再び生きることを得させていただく。割れた器に新しい命を吹き込む「金継ぎ」の発想に似た考え方、そういう信仰がキリスト教にはあると思います。

今日の聖書箇所には、色々な意味で「打ち砕かれた」人たちが登場してきます。サウロと、まだ当時呼ばれていたパウロさんもそうだし、そのパウロさんと呼び寄せたバルナバさんも、苦い経験があったんじゃないかと推察できます。そして、名も知らされぬ「彼ら」と呼ばれる人たち。「彼ら」は、ステファノの殉教の事件をきっかけとして起こった迫害の被害者たちです。

ところで、ここまでのお話で、早々にもう、不思議な御業の一端を見ることができます。ステファノ事件の関係者であるサウロと呼ばれていたパウロさんと、ステファノ事件の周辺被害者たちが、アンティオキアという街で出会い、一緒に「キリスト者」と呼ばれるようになったというわけですから、そこにはどんな葛藤があったのか、衝突があったのか、赦しがあったのか。今日のお話のメインテーマではないので触れませんが、なかなか重厚なドラマがありそうな気がしますね。

ごめんなさい、話が逸れました。今日、注目したいのは、おのあの「打ち砕かれた」経験を有する者たちが、アンティオキアという街で、それぞれに活躍し、「キリスト者」と呼ばれる存在になっていったということです。

まず、ご紹介するのは、「彼ら」と呼ばれる人たちです。ステファノ事件によって迫害の憂き目に晒された「彼ら」。「散らされた人々」とも言われている彼らは、福音信仰の下地のあるユダヤ人たちにしか、神様やイエス様のことは話さなかったと言います。自分たちの信仰を、異邦人や多文化の人に話しても意味ないし、意味ないばかりか、またトラブルに巻き込まれるんじゃないか、という恐れがあったことは、想像ができます。しかし、アンティオキアにあって密やかに主を信じて生

活する「彼ら」の中には、キプロスやキレネという外国出身の異邦人キリスト者もいました。ユダヤ教から続く聖書の伝統を持たない、新しい信仰者である異邦人キリスト者です。この異邦人キリスト者たちは、相手が、ユダヤ人だろうが、異邦人だろうが、関係ありませんでした。自分たちも異邦人なわけですから。臆せず、主イエスについての福音を告げ知らせたと 20 節には書かれています。そして、主御自身が、この異邦人キリスト者の働きを助けたのだとも、サラッと書かれています。なんか軽い感じがしますが、これって凄いことですね。それまでキリスト教宣教を担っていたのは、ユダヤ人キリスト者たちでした。それが、アンティオキアにおいて逆転し、聖書的伝統を持たない人たちが、「イエス様っていう神様の子どもがいらっしゃってね、それでね」と宣教し始めたのだと。それを神様が助けたのだと。私たちの教会に繋がる重要な出来事が、アンティオキアの街で起こったのだということです。

そんな、アンティオキアの奇跡とでも言って良いような福音宣教の知らせを聞いて、エルサレムにある、言うてみれば、本部の教会が、バルナバさんという人を特命係として派遣しました。「励ましの子」とも呼ばれるバルナバさん。その呼び名に相応しい立派な人柄と、信仰を持っていたと今日の聖書箇所にも書かれています。ところで、このバルナバさんは、ユダヤ人で、かつレビ族の生まれであり、一方で出身地はキプロスであると言われています。実は、このバルナバさんの来歴は、他のユダヤ人とは少し異なる、特殊な事情を孕んでいます。レビ族と言うのは、本来、神殿奉仕を生業とする部族でした。そのため、農業や商業といった世俗の仕事に携わることは、あまりありませんでした。しかし、エルサレムから遠く離れたキプロスで暮らしていたということは、神殿奉仕以外の仕事をしなければならないという現実直面していたということです。こうした苦難が、レビ族特有の「打ち碎かれた」歴史が、バルナバさんの人柄や信仰にどのような影響を与えたのかを考えると、彼が「励ましの子」と呼ばれるに至ったことも想像し得るのではないかと思います。

す。私は、下野した聖職者の理想像を、このバルナバさんに見出したいと思います。神様から与えられた役割と、目の前の働きとを調和させて、ここにこそ私の使命があると信じて歩む聖職者の姿ですね。バルナバさんは、自分の新たな働き場として示された、アンティオキアに、きっと深い謙虚さと熱意を携えて出向いていったんだと思います。

最後、我々キリスト者にとっては、言わずと知れたサウロとかつて呼ばれていたパウロさんについてです。素晴らしいキリスト者であったステファノが殺害された現場にも、殺害した側の人間として立っていたパウロさん。しかし、幻の中で主イエス・キリストに出会い、回心し、熱烈なキリスト教宣教者になりました。「回心し」と簡単に言ってしまいましたが、その時の心の揺れ模様、固く信じていたものを転回させることの衝撃、そして、自分が迫害していた人たちの傍に行き、赦しを乞い、一緒に働きたいと願い出た時の気持ち。想像力を逞しくて、このパウロさんの心の変容を考えると、一体、どれほど打ち砕かれ、粉々にされ、そして繋ぎ合わされて、キリストの宣教者となったのか。これも、また一本の説教として語るだけの重みと豊かさを含んでいそうですね。ともかく、パウロさんも、パウロさんなりに、打ち砕かれた経験をして、あの日、アンティオキアの街に呼び出されたのです。

迫害を経験し、傷ついた心の異邦人キリスト者たちが、同じ異邦人に声を掛け、宣教の尊い業を担いました。レビ族という神殿奉仕職を担うべき出自ありながら、外国で生まれ、伝統と現実の中で葛藤しつつ生きてきたであろうバルナバさんが、アンティオキアに派遣され、福音宣教の勢いを増し加えました。そして、かつてはキリストの敵であったパウロさんが、その過去を携えつつ、しかし、赦されて強力なキリストの助っ人としてバルナバさんに呼び出されました。2000 年前のある日、それぞれに打ち砕かれた経験を持つ者が、アンティオキアに集合し、そして、史上初めて「キリスト者」と呼ばれるようになった、と言うのが、今日の聖書箇所可喜ばしいメッセージです。

そして、この喜ばしいメッセージの背景にあるのが、旧約聖書から続く「打ち砕かれた者」に対する特別な祝福、恵みが、新約聖書の新しい福音である「キリスト者」への特別な祝福、恵みへと繋がっているということです。私たちも、それぞれに心に欠けや割れを抱えています。しかし、これらの傷を、やさしく繋ぎ合わせ、新しい意味を与え、祝福してくださる神様がいらっしゃいます。そうして新しく生まれ変わらせて頂いた先で、私たちは「キリスト者」という新しい生き方を歩んでいます。私たちは、旧約聖書が伝える「打ち砕かれた者」という古来の信仰者の姿を継承しつつ、しかし、新しい福音を受け入れて生きる「キリスト者」という。実は、私たちこそ「古くて新しい人」。折が良くても悪くても、苦難が襲っても、喜びに満ち溢れても、神様の深い愛の中を信頼して歩む、祝福された人たちなのです。

今日から始まる 1 週間も、そんな神様の御気に入り、神様の特別な配慮を注がれた一人として、胸を張って過ごして参りたいと思います。古くて新しい、我らキリスト者の上に、神様の豊かな祝福がありますように。最後にお祈りを致します。

神様。今日も私たちを、この礼拝堂に招いてくださり、感謝致します。こうして共に祈りを合わせ、讃美歌を歌える幸いを感謝致します。あなたは、古の信仰者たち、それぞれに心砕かれた経験を持ち、苦難を経た、敬愛すべき信仰者たちを用いて、キリストの福音を世界中に行き渡らせてくださいました。その宣教の歴史の最先端で、私たちは今日も礼拝をお捧げしています。その歴史の連続を心に留めつつ、どうか、私たちより後に続く、未来の世代に向けて、私たちも良き働きを為すことができますように。支え導いてください。私たちを、聖霊と信仰で満たし、日々の幸せと、用いられる喜びをお与えください。今日から始まる 1 週間も、主と共にあって、豊かな恵みを見つけつつ歩むことができますように。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」

上田キヨ子 うえだ きよこ 姉 (2023 年 2 月 2 日 召天)

松木 清 まつき きよし 兄 (1937 年 2 月 16 日 召天)

山本 順 やまもと じゅん 兄 (2022 年 2 月 18 日 召天)

谷口国夫 たにぐち くにお 兄 (1945 年 2 月 19 日 召天)

中村弘子 なかむら ひろこ 姉 (1999 年 2 月 20 日 召天)

前 伊三雄 まえ いさお 兄 (2017 年 2 月 22 日 召天)

中村ゆき なかむら ゆき 姉 (1995 年 2 月 26 日 召天)

中野敏雄 なかの としお 兄 (2004 年 2 月 26 日 召天)

中野好子 なかの よしこ 姉 (1968 年 2 月 28 日 召天)

神様。私たちは今、2 月にあなたへの御下へと召された兄弟姉妹を憶えて祈りを捧げています。

敬愛すべき信仰の先達のことを思う時、私たちの心はこの世を超えて、あなたの住まう天上にまで及びます。御国の幸いのただ中におられる方々は、必ずやあなたと共に永久の安らぎに身を委ねていと信じます。また、生前に各々成し遂げられた働きに対する十分な報いが天にはあることを信じます。そして、来る日には、私たちもまた天へと帰っていきます。主のご用意くださった場所において、再び相見える時、恥じることなくこの地上での働きをお伝えすることができるよう、どうか私たちの日々の生活と信仰とをあなたが守り導いてください。天には限りない平安がありますように、そして、地にはあなたによる力強い導きと、豊かな慰めをお与えください。

この祈りを我らの主イエス・キリストの御名を通して、あなたの御前にお捧げ致します。